



立入が丘小学校だより



探求心から生まれる気付き

2学期が始まって1か月。今年は残暑に苦しめられることはありませんでしたが、豪雨被害が出る地域があるなど雨の日が多く、これも地球温暖化の影響ではないかと心配しています。因みに国土交通省の方のお話によると、野洲川は100年に一度の大雨には耐えられるそうです。ただし、想定を超える雨量となるとどうなるかわからないとのことでした。また、大雨による浸水被害は堤防の決壊だけでなく、雨量に街の排水が追いつかなくなることによる浸水があり、そちらの方が心配だとも話されていました。もしもの時の備えや心構えの必要性を感じました(4年生が野洲川調査隊の活動でこのお話を聞いています)。

先日、新聞記事で蚊取り線香の記事が載っていました。蚊取り線香と言えば、夏の季語としても使われますが、夏真っ盛りの8月よりも夏の盛りの過ぎた今の方が蚊が活発に活動しているように感じます。発明から136年が経つ蚊取り線香は、今では蚊の駆除の主流ではありませんが、我が家ではキャンプのときや家庭菜園の作業の時などに重宝しています。記事によると、大日本除虫菊(KINCHO)の創業者は、ミカン農家に生まれ、ミカンの輸出を考えていた時に、米国の貿易商からミカンの苗木のお礼にと受け取った除虫菊の種が、蚊取り線香発明のきっかけとなったそうです。創業者は除虫菊の栽培に着手し、国内でノミ取り粉として行商を始めたときとされています。そして、この除虫菊を火鉢にくべた時に蚊が嫌がり、蚊よけとして「いけるんちゃう？」と思いついたそうです。しかし、夏と火鉢は縁遠く、考えあぐねていた時に、線香を見て「これだ」と思い、試行錯誤の末、除虫菊を線香に練りこむ棒状の蚊取り線香を発明したとされています。しかし、1本の燃焼時間が40分ほどで、「寝ている間も安心」とはなりません。この課題を解決したのが、創業者の妻がとぐろを巻いた蛇を見た時に思い付いたアイデアでした。その結果、7時間燃焼する現在の形が出来上がったそうです。製造に当たっても課題があったそうです。出来たての蚊取り線香は半生の和菓子のように柔らかく、板の上で自然乾燥させます。乾いて取り込むときに、板に引っついて崩れてしまうことがあるそうです。この課題を解決したのも創業者の妻の「魚を焼くように網の上で乾かせば崩れない」との思いつきでした。この画期的な発明をした夫婦は、日常の身近な物事をじっくりと観察、考察できる人物だったのだと思います。そこには、稲作農業と歩んできた日本人にとって、蚊は古代からの悩みの種であり、「有効な蚊よけを作りたい」という思いから湧き上がる探求心があったからだとも思います。



子どもたちにとっても、探求心をもって日々の学習に取り組むことは大切です。受動的に授業を受けるのではなく、「なんでだろう」「やりたい」という思いをもち、主体的な学びをすることで、学びの幅や深みが増します。2学期になり、4年生が理科の学習で育てているヘチマに、朝や休憩時間に何人かの子どもが集まるのが度々ありました。「ヘチマを食べてみたい」というのが動機でした。これまでの4年生は、たわしを作ることはしていましたが、食べるのは新たな発想です。子どもたちは、意欲的にヘチマの様子を観察していました。その中で、花のどこに実がなるのかが分かることで、ヘチマの花には2種類(雄花と雌花)があることが発見でき、5年生の学習に繋がります。食べ方を考えることで家庭科の調理の学習にも繋がります。茎や葉に蟻が這っていることや、クマバチがたくさんやってくることに子どもたちは気付いています。「何でだろう」と思うことができれば、新たな学びが始まります。そんな学びをしてほしいと思っています。



私が小学校3年生の時、野球に興味をもち、毎晩のようにプロ野球中継を見ていました。その中で、「打率って何?」「勝率って何?」という気持ちから、計算の仕方を調べて遊びの中で打率や勝率を計算して楽しんでいたのを覚えています。自然と算数科の割合について学んでいたこととなります。探求心があると学びが楽しくなります。こんな学びを学校生活の中に増やしていけたらと思っています。